欧米における日本庭園像の形成と原田治郎の *The Gardens of Japan*

片平　幸

一　はじめに

本稿では、西欧における「日本庭園」のイメージの形成を捉える上で重要と思われる原田治郎という人物を紹介する（写真1）。一九二八（昭和三）年に刊行された原田治郎の *The Gardens of Japan* は、日本人による英語で著された日本庭園論としては最もはやい単行本である。[1] それ以降の一九三〇年代に入ると、日本人による英語の日本庭園論の著作が増加するが、それらはいずれも日本国内での出版であった。[2] それに対して原田の *The Gardens of Japan* は、欧米で影響力をもった美術雑誌 *The Studio* の発行元である The Studio社（イギリス）から出版されている。そうした事情を背景としつつ、原田の著作は日本人による文献としては突出した頻度で、その後の英語圏の日本庭園論に参照されていく。

写真1　原田治郎（提供 原田俊夫氏）

西欧の言語で著された日本庭園の記述は、十七世紀のオランダ商館付きのドイツ人医師であったケンペル（Engelbert kämpfer, 1651–1716）にまでさかのぼることができるが、それらは日本文化全般について論じたなかの一部であったに過ぎない。十九世紀も終

わりになって、庭園を独立したテーマとして初めて扱ったのが、イギリス人建築家のジョサイア・コンドル（Josiah Conder, 1852-1920）の*Landscape Gardening in Japan*（一八九三）である。[3] コンドルの著作は原田と並んで、二十世紀前半の英語圏で形成される日本庭園論において、参照枠として頻繁に挙げられていった。

コンドルの著作を契機として、十九世紀以降の西欧で日本庭園論が繰り広げられていくが、そうした状況に対して、一九二〇年代後半の日本国内である種の自覚が次第に芽生えはじめる。西欧における関心の高まりを踏まえつつ、日本国内の庭園研究者たちは、欧文による日本庭園論を発信するようになった。しかし、日本人によるいわば西欧向けの日本庭園論は、農学や工学を中心に発達した日本国内での日本庭園論と必ずしも同調するものではなかった。こうして、葛藤や矛盾をはらみつつ西欧と日本のあいだを行き来した日本庭園論は、一九三〇年代半ば以降の欧米において或る日本庭園像の生成を促すこととなる。

では、英語圏における日本庭園像の形成過程で、原田の著作はいかなる役割を果たしたのだろうか。これまで日本国内では、庭園研究者たちはもちろん、美術研究者たちからも原田の業績は顧みられることはなかった。原田の*The Gardens of Japan*は、欧米と日本とで対照的な反応を引きおこしたのである。そこで本稿では、原田の業績をまとめながら、彼の提示した日本庭園像を明らかにしたい。原田に関する資料は断片的でなおかつ散在しておりいまだに不明な点が多いが、これまで収集し得たかぎりの情報に基づき原田の経歴をまとめ、*The Gardens of Japan*に検討をくわえていく。さらに、原田の著作に対する西欧と日本における反応についても概観した上で、これまで庭園史に描かれることのなかった西欧と日本の関係の空白を埋めていくことを試みたい。なお、本稿ではgardens of Japanに対応する語として「日本庭園」という語を用い、寺院の庭園や個人宅の庭園を含む日本にある庭園を指すこととする。

二　原田治郎の略歴

原田治郎は、一八七八（明治十一）年十二月二日に山口県大島郡に生まれ、十五歳で単身渡米する。その後間もなくして、列車事故に巻き込まれ左足と右手の指を失うという生涯の傷を負うも、現地の高校を卒業しカリフォルニア州立大学へ進学した。一九〇四（明治三十七）年の米国セントルイス博覧会の運営に携わり、日本には翌年に帰国している。帰国後の一九〇九（明治四十二）年に、名古屋工業高等学校（後に名古屋第八高等学校、現名古屋大学）で英語講師として指導にあたった。

翌年には、日英博覧会の特使として渡英する。この渡英の頃から、原田はイギリスの美術雑誌*The Studio*に関わるようになる。一八九三（明治二十六）年に創刊された*The Studio*は、*Studio Interna-*

tional（一九六四年六月）と改名した後、一九八八（昭和六十三）年までの約百年にわたって発行された。拠点としたイギリスだけでなく、英語圏をはじめとして広く世界各国に認知された美術雑誌であった。草創期には、イギリス国内における美術の近況にとどまらず、欧州全般の美術の動向について写真を交えながら報告している。

原田の記事が *The Studio* に登場する以前の一九〇二（明治三十五）年には、岡倉天心（一八六二―一九一三）による日本美術の記事が掲載されていた。[4] 周知のとおり、岡倉はフェノロサ（Ernest. F. Fenollosa, 1853-1908）らとともに、国内における日本美術の保護と普及だけでなく、西欧における日本美術理解の素地形成に中心的な役割を果たした人物である。その岡倉による記事から八年後の一九一〇（明治四十三）年に、*The Studio* に原田が登場することになる。

The Studio に初めて掲載された原田の記事は、川合玉堂（一八七三―一九五七）を初めとする日本画の作家と作品を紹介するものであった。その記事は Japanese Art and Artists of Today と題され、原田は絵画のほかに、「彫刻」や「陶器」など計五回に分けて連載し、日本美術を紹介している。[5] これらの記事に共通しているのは、まるで展覧会のカタログのように、解釈や批評を挟むことなく作品・作家の紹介をするという原田のスタンスである。その後も、*The Studio* 誌の世界各国における美術の近況を報告するコラムに、原田は日本在住の特派員として執筆を続けた。そのほか、特集記事を含めてほとんどの執筆を原田が担っており、扱ったテーマは先の絵画や彫刻などに加えて建築や盆景など多岐に亘っている。しかし一九四〇（昭和十五）年以降になると、日本に関する記事そのものが減少し、それらの記事もほかの執筆者によって書かれるようになっていった。原田による最後の記事は、一九五六（昭和三十一）年に掲載された盆栽に関するものであった。[6]

一九二三（大正十二）年になって、原田は The Japanese Garden と題された記事を執筆している。[7] これは *The Studio* 誌上に現れる初めての日本庭園に関する記事である。この記事で原田は日本人の自然観を論じた上で、枯山水や書院庭そして茶庭などの様式を紹介しているが、総じて具体例についての詳述はない。掲載された写真は、原田本人の自宅を含む名古屋の個人宅の庭園を撮影したものである。そのほか庭園に関する記事は、京都の青蓮院、[8] そして東京の渋沢邸の庭園[9]と浜離宮庭園[10]が確認できる。いずれも写真を掲載し、沿革を説明するというカタログ風の記述がなされている。*The Studio* では断片的に提示されたに過ぎない原田の日本庭園論は、一九二八（昭和三）年に *The Gardens of Japan* としてまとめられることになった。

The Studio に関わり始めた一九一〇（明治四十三）年には、京都商品陳列所による来訪外国人のための案内書 *The Official Cata-*

*logue*の執筆の一部を担当している。[11] 本書では庭園に触れているのは三頁に過ぎないが、その限られた紙面には、京都の庭園に及ぼした禅の影響についての記述がある。この点については原田の庭園論の内容を分析する際に再び触れるが、禅の影響を英語で論じたものとしては、もっとも早いものと考えられる。原田はその後、一九一四（大正三）年には従六位に叙され、二年後には、勲六位瑞宝章を授与された。そして一九二六（昭和元）年から、「英文列品目録及解説編集事務並通訳嘱託」として東京帝室博物館に採用された。国際化に伴う諸制度が整いつつあった帝室博物館で、原田は欧文の解説札の作成など、主に海外に関連する実務を担当していく。[12]

帝室博物館に勤務中の一九三五（昭和十）年には、米国のオレゴン州立大学で日本美術について二学期六ヶ月にわたる講義を依頼された。オレゴン州立大学のバーカー総長が、「日本の碩学を招聘して日本のことを学生に聴かせたい」と願い、「どうしても招聘していきたいと言った人が原田」であったという。[13] 欧米において、原田治郎が認知されていたことを示唆するエピソードといえるだろう。オレゴン州立大学の日本美術講座は盛況であり、学内外からの聴講希望者が予定人数を大幅に上回ったので、大学側は講堂をつかって対処した。[14] 大学での講義期間を終えた後も、米国各地の大学や博物館で日本美術について講義し、毎回大勢の聴衆が集まったという。オレゴン州立大学は、その翌年に「満場一致」で原田に名誉博士号を授与しており、アメリカで原田が歓迎されたことがうかがえる。[15] のちに原田は、この一連の講演記録に加筆修正し、*A Glimpse of Japan*（一九三七）として出版した。

第二次世界大戦中には、日本の歴史・文化遺産をアメリカ軍の空爆から守ったことで知られる美術研究家ウォーナー（Langdon Warner, 1881-1955）や、イギリス留学から帰国し、通商産業省（現経済産業省）の設立に中心的な役割を果たした白洲次郎（一九〇二―一九八五）などと親しく交流していたという。戦後間もなく、原田は進駐軍のバス・ツアーの案内を引き受け大宮の盆栽村を訪れるなど、日米交流の実践者であった。[16] そうした戦後の活動のなかでも特に目を引くのは、博物館における実務レベルでの渉外である。一九五一（昭和二十六）年に開催されたサンフランシスコの日本古美術展での活躍は、その一例といえる。[17]

サンフランシスコ市のデ・ヤング記念美術館で一九五一（昭和二十六）年九月六日から同年十月七日まで講和記念として開催された「日本古美術展」は、戦後最初の海外展であった。一九五〇（昭和二十五）年一月に、アメリカ大使館の参事官から当時の首相吉田茂に依頼されたが、社会情勢に鑑み、日本政府は断りの意向を示した。しかし翌年七月にサンフランシスコ市のデ・ヤング記念美術館館長ウォルター・ハイルは、それ以前に渉外担当として面識のあった原田に、展覧会の開催を直接要請した。交渉は、ハイルと「原田事務

官の個人折衝」で進められ、展覧会が実現するに至った。[18] 展覧会は、わずか一ヶ月という「これまでにない短時日で事務が処理」されたが、連日大盛況となり、「この間英語に堪能な原田事務次官や金子技官（国立博物館技官金子重隆、筆者註）は、ほとんど連日講演や解説に忙殺された」という。[19] この日本古美術展覧会は、原田の尽力によって実現したといっても過言ではない。

この頃、原田は文化財保護委員会委員や正倉院審議会委員、そして日本庭園協会の評議員を務め、さらに国内で開かれる海外展の際には皇族の通訳に従事している（写真2）。こうした経歴からみて、戦後の日本美術業界において原田の存在がそれ以前より広く認知されていたといえるだろう。一九六三（昭和三十八）年七月二十五日に没し、その後、正五位に叙せられ、勲五等瑞宝章を授与されている。

写真2　皇族の通訳を務めた原田治郎（提供 原田俊夫氏）

三　原田治郎の日本庭園論

略歴からわかるように、セントルイス博覧会や日英博覧会、そして *The Official Catalogue* や *The Studio* 誌上の執筆など、原田はアメリカで学んだ英語を活用し、英米を中心とした西欧諸国と日本の間を媒介する役割を担っていた。日本に帰国して以降は、一九三五（昭和十）年にオレゴン州立大学から招聘され名誉博士号を授与されている一方で、日本国内では、近年に至るまで原田治郎に関する報告がほとんどなされていないということは実に対照的である。日本国内外で下された評価のギャップは後に触れることとして、まずは、原田治郎の庭園論を考察していく。以下では、*The Gardens of Japan* の内容のうち、後に英語圏における日本庭園論に影響を及ぼした諸点、すなわち、原田による日本庭園の特徴と参照枠に関する議論の分析を試みたい。*The Gardens of Japan* の重要な特徴の一つに、岡倉天心を参照していることが挙げられるが、特にその点に注目し、岡倉に依拠した原田の日本庭園論が同時代の庭園研究のなかでどのように位置づけられるのか、またそれは英語圏におけ

る日本庭園論にどのような役割を果たしたのかという問題を考えていく。さらに、*The Gardens of Japan*に収められた画像を取り上げ、原田の日本庭園論がいかに視覚的に補完されたのかについても検証していく。前述のコンドルの*Landscape Gardening in Japan*は、日本の庭園の画像を体系的に欧米に伝えたものとしてはもっとも早いものであることから、コンドルと原田が用いた画像を適宜比較し、日本庭園に注がれた眼差しの変遷において、原田の*The Gardens of Japan*の担った意義を明らかにしていきたい。

（1） 禅と茶の湯〜屋内からの眼差しの強調

*The Gardens of Japan*は、文章と写真の二部から成るが、文章は本書全体の約四分の一で残りの大部分は庭園の写真で占められている。本文は、日本人の自然観について論じた「Introduction（序）」と日本庭園の通史を記述した「History（歴史）」、そして実際の庭作りの実践書としての性質の強い「Different Styles of Nippon Gardens（様式の種類）」と「Gardens Parts and Accessories（庭の部品と付属品）」、さらにそれらを総括した「Conclusion（結論）」の全五章から成る。分析に入る前に、全体の内容とその参照枠を概観しておこう。

歴史の章では、「To Nara Period 781AD（奈良時代まで）」、「Heian Period 782-1185（平安時代）」、「Kamakura Period 1186-1335（鎌倉時代）」、「Nambokucho Period 1336-1393: Muromachi Period 1394-1573（南北朝時代・室町時代）」、「Momoyama Period 1574-1602（桃山時代）」、「Edo Period 1603-1867（江戸時代）」、「Since the Restoration of 1868（明治維新以降）」の七つに時代を区分し、それぞれの時代における様式の変遷が説明されている。

このような庭園の通史が最初に著されたのは、一八八九（明治二十二）年に出版された横井時冬（一八五九－一九〇六）による『園芸考』である。[20] 横井の歴史叙述の手法は、コンドルの*Landscape Gardening in Japan*にも参照されたが、その後の庭園研究においても、更新されながらも継承されていった。一方、「様式の種類」と「庭の部品と付属品」では、一八二九（文政十二）年に刊行された秋里籬島の『築山庭造伝』から挿絵を転載して具体的な作庭法について説いている。明治期と近世の庭園書をそれぞれ参考にしながら、原田は歴史や作庭法を紹介しているのだが、これらの参考資料や全体の構成からはコンドルの*Landscape Gardening in Japan*との共通点が多く見出せる。加えてこの時期には、造園学の成立に伴い庭園に関する書物の出版が相次ぎ、日本国内でも日本人研究者による庭園の通史が著されるようになっていく。すでにコンドルの著作が出版され、さらに庭園に関する書物が量的に増加し始める時期にあって、原田の*The Gardens of Japan*はどのような役割を果た

し得たのだろうか。この問いに取り組む上で重要な鍵となるのが、岡倉天心の茶の湯論であったと思われる。

日本の庭園史を捉える上で、茶の文化が重要な要素であるという理解そのものは近世の庭に関する文献にまでさかのぼることができ、さらにそれらを参考資料としたものに明治時代にはコンドルや横井時冬、大正から昭和初期には田村剛（一八九〇－一九七九）や龍居松之助（一八八四－一九六一）などがいる。[21] それらの庭園論との比較において、原田の *The Gardens of Japan* の特徴を挙げるとするならば、茶の湯のみを単独で扱うのではなく、禅との連結として捉え、それを庭園史の画期とみなした点であろう。原田の論旨を要約すると、鎌倉時代に日本に伝わった禅は、「the elegance and refinement of simplicity（簡素の優雅さと洗練）」に価値をおくことを説き、それは室町時代まで継承され日本芸術のすべてに影響を及ぼしたという。原田は茶の湯を「日常生活の俗事の中に存する美しきものを崇拝すること」と定義し、茶の湯とは、禅の影響を集約した日々の実践であると説いている。この部分は、本文中に註はないが、岡倉天心の *The Book of Tea* の冒頭にある一節と特定できる。[22] 岡倉が「わが国の偉い茶人は皆禅を修めた人であった」と述べ、かれらが茶の湯を通じて禅の精神を日々の生活に導入したという理解を示した部分を引用したのである。さらに、禅とはあらゆるものにshibumi（渋み）を与えたとして、渋みを「文化に精通した人間のみが感得しうる激しさのない謙虚な厳粛さ」と定義している。[23] 原田が禅と茶の湯の結合を画期とみなしていたことは「Zenism, combined with other-isms, strongly established itself in connection with *cha-no-yu*, which revolutionalised our garden.[24]（禅道は、ほかの異なった教え・イズムとも混交し、茶の湯とともにその教えを確立したが、それはわれわれの庭を大きく変革した。）」という一文に端的に示されている。単に「Zen」ではなく「Zenism」という語が使われているが、これもまた岡倉の著作に依拠するものである。原田はさらに、禅の影響が室町時代に庭に具現化されたとして次のようにまとめている。

> Hitherto the gardens were so constructed as to be admired primarily from without, but now they came to be so laid out as to be enjoyed from within as well, thus opening a new era in their development.[25]
>
> （それまで主に外から鑑賞するべく作庭されていた庭園は、ここで屋内からも享受するように配列されるようになり、庭園史における新しい時代を切り開くこととなった）

禅・茶の湯との結合は、庭園を鑑賞する側の視点の移動の契機となったという原田の庭園観がここに示されている。これより以前、

*The Studio*に掲載されたThe Japanese Gardenという記事の中で、原田は日本の庭は、野外よりも屋内からの鑑賞に適しているという見解を示していたが、そこでは具体例が挙げられておらず、屋内から鑑賞する庭園とは何を指すのか、またどのように成立したのかを特定していない。つまり*The Gardens of Japan*において、原田は屋内からの鑑賞法の成立と禅とを結合させて、より具体的に画像を伴い英語圏の読者に示したことになる。

室町時代における禅と茶の湯の結合の重要性は、さらに、江戸時代後期における茶の湯文化の衰退と明治時代における復活という歴史観によって強調される。原田は、茶の湯の衰退を特徴とする江戸時代を室町文化と対峙させ、さらに明治時代の茶の湯の復活こそが庭園における日本の独自性の維持を可能にしたと論じている。江戸時代の特徴を、作庭が「"tea-men" and priests（茶人や僧侶）」から「*niwa-shi*, or gardeners（庭師、あるは植木屋）」の手に渡ったことと述べ、桂離宮が築造されて以後は、それまで京都で盛んであった庭園文化が江戸へ移った時期と論じている。作庭が「茶人や僧侶」から「庭師」へと移行したことを、原田がいかに捉えていたのかは、以下の一文から読み取ることができる。

It may be noted here that the cha-seki gardens gradually ran to artificialities, vainly copying the outer forms of past masters, without understanding their inner meanings, finally ending in stereotyped formulae.[26]

（茶席の庭は次第に人工化に陥り、みだりに過去の名匠の外面的な形だけを内なる意味を理解することなしに模倣し、最終的に定型化される結果となった。）

江戸時代後期の「茶人や僧侶」から「庭師」への移行が、庭園の人工化と定型化を引き起こしたと論じ、室町時代からの変化、あるいはある種の断絶が特色づけられる。室町時代に熟した庭園文化が、江戸後期の庭師達には継承されなかったとする原田の理解が読み取れる。しかしそれは明治時代に入るとさらなる変化を遂げるという。明治の極端な西欧化への反動として、一度は衰退する茶の湯の文化が復活したと述べ次のようにまとめている。

As a reaction against intoxication with things foreign, *cha-no-yu* was revived, which helped to retain refinement and Nippon taste in our gardens.[27]

（外国のものごとへの陶酔に対する反発として、茶の湯が復興し、われわれの庭の高雅さと日本らしさを維持し続けることができるようになった。）

原田にとって、禅と結びついた茶の湯の復活とは日本庭園の独自性の再確保あるいは維持を意味していたことがわかる。では、このような禅と茶の湯の関係性を特化する原田の庭園観は、同時代の庭園研究においてどのように位置づけられるのだろうか。

（2）原田の庭園論の参照枠〜岡倉天心の茶の湯論

表1「欧文による日本庭園に関する図書」は、鈴木誠による資料を基に、筆者がさらに独自の調査を加え作成したものであり、この時代に出版されたおおよその傾向が把握できるが、[28] この表を基に庭園論の禅に関する記述の系譜を確認しておきたい。

欧米人による日本庭園論の中で、まずコンドルの著作では、茶の湯の影響のみが論じられており、禅については触れられていない。コンドルは鎌倉時代の項目に仏教の伝来について述べているが、禅宗についての記述はなく、室町時代の項目での茶の湯に関する記述にも禅あるいは仏教との関係性についての言及はない。表中で禅に関する記述が英語で確認できるのは、一九一〇年に京都商品陳列所から出版された全三七頁の*Official Catalogue*である。庭園の項目はわずか三頁割かれているに過ぎないが、その中に「The Influence of the Zen sect of Buddhism and of Tea Ceremony began to tell on the gardens and buildings, especially in the Ashikaga Era.（仏教の禅宗とお茶は、特に足利時代に庭や建築物に影響を及ぼすようになった）」とある。先述のように、本書の執筆には、名古屋で工業高校の講師をしていた原田が関わっていたことがわかっている。この箇所は一九一二年には、Basil Taylorによる*Japanese Gardens*に引用されている。Taylor以降は、原田の*The Gardens of Japan*が出版されるまでの間には、旅行記などに日本庭園について触れるものが増加するものの、日本の庭園史を扱う書物そのものが減り、禅と日本庭園の関係性について論じられているものは管見の限りでは見出すことができない。英文による日本庭園論に禅が扱われるようになるのは、原田以降の一九三〇年代である。原田以降の英語文献における禅の扱いについては後に分析するが、一九三〇年代に出版され禅について触れているものの多くが、原田の*The Gardens of Japan*を参考文献として挙げているのである。

日本国内の庭園論では、先述のように、茶の湯の影響についてはすでに近世の庭に関する文献に、一方、禅の影響は、明治時代に横井時冬の『園芸考』にも記述されており、それ以降の文献からも見出すことができる。一九二〇年代に入ると、公園の造営や都市整備など実質的な問題を課題とした造園学の成立に関心が集中し、一九二五年に造園学会が設立されるなど、造園学を扱う教育機関が整備されていく。散在していた庭園の資料の収集や整理が行われていき、一九二〇年代後半から一九三〇年代にかけては、雑誌など媒体の増加に伴い、造園学という領域を超えて、日本庭園の独自性を模索す

る言説が量産されていく。[29] こうした状況を背景に、原田の日本庭園論は執筆されたが、特に禅の影響が特化されていく言説が増加する一九三〇年代に先駆けて英語で出版されたとはいえ、同時代的な思潮から突出したものとはいえない。

この中で、原田の庭園論の特徴とは、共有され始めていたと考えられる庭園観を、岡倉の茶の湯論を換骨奪胎しつつブレンドし、それを英語で論じた点に集約できるのである。その庭園観は、茶庭について論じている一節により具体的に示されている。

Some aimed to create in it a feeling of utter loneliness of sylvan solitude or as suggested by (イ) "a solitary cottage on the sea beach in the waning light of an autumn eve." Others tried to interpret in the garden path the feeling such as suggested by the verse (ロ) "Oboro zukiyo umi sukoshi aru konoma kana." ("A pale evening moon, a bit of the sea, through a cluster of trees.") What was aimed at in creating such a garden was "the solitude of a newly-awakened soul still lingering amid shadowy dreams of the past, yet bathing in the sweet unconsciousness of a mellow spiritual light, and yearning for the freedom that lay in the expanse beyond," as so ably commented on by Okakura.[30] ((イ)、(ロ) は引用者)

茶室の庭は、「人里を離れた森林の孤独のうちの完全なもの悲しさという感情」を引き起こすべきであると説くために、原田はここで岡倉の*The Book of Tea*の中の「茶室」の章で用いられた二つの歌を孫引きしている。(イ) は、藤原定家の作、千家流に伝わるとされる「見渡せば花ももみじもなかりけり浦のとまやの秋の夕暮れ」であり、(ロ) は宗砌の連歌の中の一句と言われ、『茶話指月集』に収められたとされる「朧月夜海少しある木の間かな」である。それまでの庭園書にも、茶庭の心得を説くために歌や俳句が引かれており、事実、(ロ) の「朧月夜海少しある木の間かな」は小堀遠州が説いたとして、横井時冬の『園芸考』の他、コンドルを含む国内外の庭園書に引用されている。一方、(イ) の「見渡せば〜」を引用している庭園書はほとんどなく、江戸時代の俳諧師で『築山庭造伝』(一八二九) を著した秋里籬島が『茶話指月集』の中から引用した「樫の葉のもみじぬからにちりつもる奥山里の道の寂しさ」が、孫引きされることが主流である。[31] 秋里ではなく岡倉の茶室論に依拠した上述の一節には、秋里の系譜から外れるが横井の系譜は継承する要素と、岡倉天心の茶室論との混在が認められるのである。また、これまでの庭園書ではこの歌は引用されるのみで、具体的な

解釈が示されていなかったのに対して、原田は、岡倉天心の言葉を引用することによってこれらの歌の解釈を特定した。岡倉からの引用箇所のlingering amid shadowy dreams of the past（過去の夢の中をさまよいながら）や、bathing in the sweet unconsciousness（無我の境地に浸る）という表現が示すのは、過去と現在をわける境界、そして無意識と意識をわける境界の曖昧さである。岡倉に依拠し、茶庭とは、境界によって分断され得ない心象をもたらすと規定したことは、原田の庭園論の特徴といえる。

岡倉は、茶の本質とは、incomplete（不完全さ）の崇拝であり、茶室とは、想像力の作用によって完成へと仕上げるために、あえて未完成のままに残しておくのであると説いた。実際の茶室と人の想像力との境界が溶解する境地とは、作品と鑑賞者とのsympathy（共感）とcommunion（交流）が根幹を成す岡倉天心の日本美術観にも通じている。[32] 岡倉による鑑賞者の想像力が作品の一要素であるという茶の湯論を踏襲し、禅と茶の湯の結合による鑑賞者の視点の移動を庭園史の重要な転換とみなす点こそが、原田の庭園論の特徴として挙げられるのである。こうしてみると、先にみた原田による「外から鑑賞されていた庭が、内から鑑賞する対象となり庭園の発展を切り開いた」という解釈と、岡倉天心の *The Ideas of the East*（『東洋の理想』）の最後の一節との親縁性が一つの可能性として思い浮かぶ――Victory from Within, or a mighty death without.（内からの勝利か、しからずんば、外からの強力な力による死あるのみ）[33]」。岡倉はこの一節に、インドを中心としたアジア諸国の発展のあるべき姿を集約させた。アジアの発展とは、外的圧力によるのではなく内発的であるべきだと、簡潔にして詩的に説いた箇所である。そうした岡倉によるアジアの内発的発展史観と、原田による庭園の発展史との表現上の類似は興味深い。「内からの勝利」を、「内からの鑑賞態度」へと換骨奪胎し、禅と茶の湯そして渋みの結合を、「内から」の勝利と発展の原動と示唆したのではないかという可能性を提示しておきたい。

以上の内容を踏まえて、次に *The Gardens of Japan* 所収の画像を考察していきたい。先述のとおり、本書は全体の四分の三を写真で占められており、本文の内容を補完する独特のアングルで撮られたものが多い。これらの画像は、欧米諸国における日本庭園観にどのように作用したのかを明らかにするために、*The Gardens of Japan* の画像の分析を試みよう。

四　原田治郎の画像の特徴――写真のなかの日本庭園

庭園を対象とした写真が果たす役割は、その状態を記録したり伝達するという機能だけでなく、その時代の見方の傾向や鑑賞の位置、そしてそれらを規定する価値体系をも映し出すといえる。このような関心に立脚し、以下では、原田の *The Gardens of Japan* に収録

対象とする庭園の選択や被写体をとらえるアングル、また構図や光の取り入れ方などの点においてコンドルとの大きな相違が認められる。そこで、それまで西欧における日本庭園の見方を定式化していたと考えられるコンドルの画像の提示法を適宜参照しつつ、原田の庭園写真の提示法を論じていきたい。最後に、原田の画像の全体的な特徴をまとめた上で、コンドルと原田が共通して選んだ鹿苑寺（金閣寺）庭園と岡山の後楽園の写真に検討をくわえていく。

（1）眼差しの変遷〜コンドルの画像との比較

原田の*The Gardens of Japan*の写真の特徴は、本文に呼応する撮影地点と画面構成にある。茶の湯と禅の結合をNippon Taste（日本らしさ）とみなし、その成立が室内から鑑賞する庭園を誕生させたという論旨に応じて、多くの京都の庭園が作庭例として選出されている。それらの写真に共通してみられるのは、室内を思わせる撮影地点と、庭園を真正面からではなく斜めの方向から捉えるアングル、そして後景に焦点を合わせ前景の一部を接写するという構図である。これらの特徴をもった*The Gardens of Japan*の写真には、どのような意図が込められていたのだろうか。

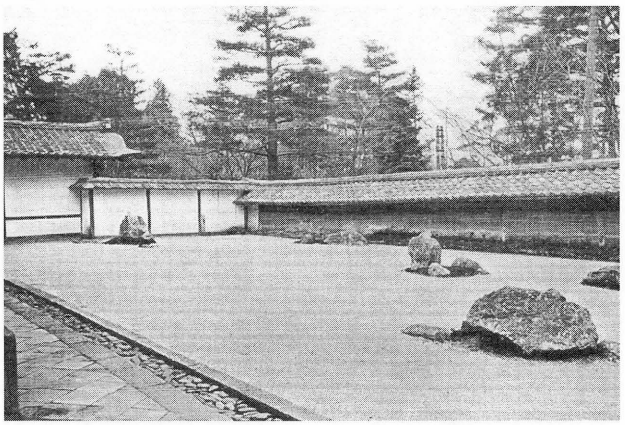

写真 3　龍安寺庭園（Harada，1928）

写真 4　醍醐寺三宝院庭園（Harada，1928）

された写真に検討を加えていきたい。原田の著作の以前には、日本庭園の写真は、まず欧米で開催された万国博覧会で展示されているが、最も体系化されたものは、コンドルの*Landscape Gardening in Japan*にSupplement（付録）としてつけられた別冊の写真集である。コンドル以降は、欧米人による日本庭園に関する記述に写真を提供したものは少なく、写真が用いられている場合でも、コンドルの著作からの転用が多い。[34] 一方、原田の*The Gardens of Japan*は、西欧に日本庭園の写真を紹介する点では同じでありながらも、

室町時代の作庭例として収められた龍安寺庭園の写真をみてみよう（写真3）。龍安寺は一四五〇（宝徳二）年に細川勝元によって細川氏の菩提寺として建立されたが、築地塀で囲まれた約百坪の方丈南縁の庭で知られている。一面に白砂が敷かれ、その上に大小十五個の庭石が配置されているが、写真3は方丈の前庭を、真正面からではなく右斜めから撮影したものであり、「虎の子渡し」や「九山八海」そして「神仙五島」とも言われる五群の庭石の左右非対称性が強調されるアングルである。写真の左側手前からは、石庭と建物の境界が放射線状にのびており、建物側を撮影地点として、低い目線で撮られている。視線は白砂の上を対角線上に誘導され、撮影地点があたかも縁の延長線上、つまり方丈の建物内に位置しているかのような効果を生みだしている。

写真5　南禅寺方丈庭園（Harada, 1928）

龍安寺で示唆された屋内からの眼差しは、醍醐三宝院と南禅寺方丈の写真に明示されている。桃山時代の作庭例として挙げられた京都醍醐寺の三宝院庭園（写真4）は、平安時代の寝殿造りを模して造営されているが、庭の中心に位置する蓬莱島と瀛洲島を屋内から眺めるように撮影されている。画面の左半分の屋内は暗く、画面の右半分を占める景観は自然光によって照らされており、屋内外のコントラストが際だっている。また画面の左上の屋根のひさしと画面下方の方丈の縁は、方丈の内側から撮られたことをもの語る。

建物側から注ぐ眼差しと明暗のコントラストは、南禅寺方丈庭園の写真にも見出すことができる。南禅寺は一二九一（正応四）年に禅院として創築されたが、現在の方丈は一六一一（慶長十六）年に清涼殿を移築したものであり、*The Gardens of Japan*には江戸を代表する庭園として選出されている。写真5には、築地塀に沿って置かれた「虎の子渡し」として知られる景石と、楓と松そして椿とサツキの丸刈り込みが右斜めの方向から撮影されている。真正面から左右対称に捉えるアングルの忌避と、画面前景の陰影と後景の自然光という明暗のコントラストの強調は、室内外の差異と庭園の奥行きをより明示する役割を果たしているといえる。

*The Gardens of Japan*の画像の選出と画面構成の特徴は、コンドルの付録に所収されている画像と比較するとより明確にみえてくる。コンドルの付録には、日本全国から三十三ヶ所の写真が順不同

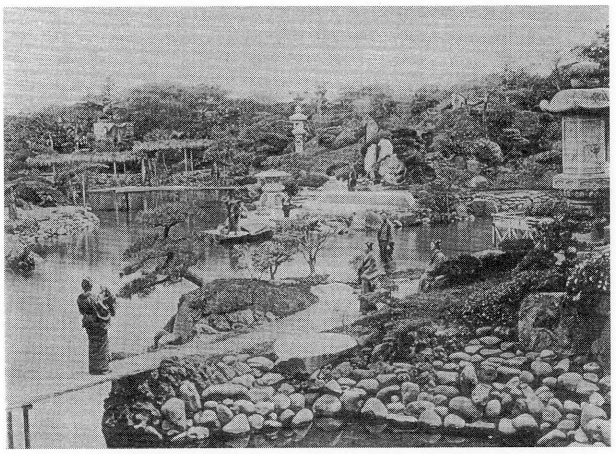

写真6　堀田邸庭園（Conder，1893）

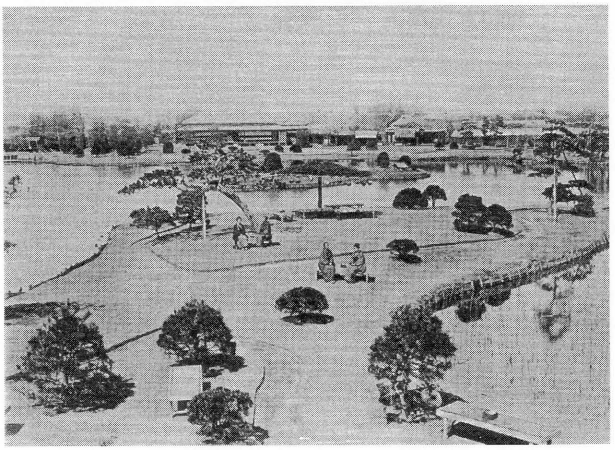

写真7　向島百花園（Conder，1893）

で綴じられているが、原田が京都の庭を多く挙げたのに対して、コンドルが挙げた京都の庭は、京都御所と金閣寺、銀閣寺そして西本願寺滴翠園のわずか四ヶ所のみである。コンドルは、執筆当時、等持院や西芳寺そして龍安寺や清水寺など京都の庭園が荒廃していると述べており[35]、京都に比べて状態が良好であった東京の庭園を中心に写真が扱われたと推察される。また、原田が本文に呼応した画像を選んでいるのに対して、コンドルの場合は必ずしもそうではない。本文では触れられていない松島や琵琶湖といった自然の風景が含まれている一方で、西芳寺や龍安寺など本文中で触れられながらも写真が掲載されていない庭もある。

選択された庭園の違いに続いて、原田とコンドルの画像の構図を比較してみたい。原田の画像が明暗のコントラストや左右の非対称性が強調されていたのに対して、コンドルの写真は、それとは対照的に庭の全景を一望するパノラマ風の構図が用いられている。堀田邸庭園（写真6）や向島百花園（写真7）のような全体を俯瞰するアングルは、特に被写体が大規模な回遊式庭園などの場合、敷地の広大さを伝える意味で適している。照明に関しては、被写体には全方向からまんべんなく光があたり、庭園に配置された樹木や灯籠、そして橋や石などが識別しやすい。しかし一方で、拡散する自然光が庭園の配置物を均等に照らしているため、画像上に陰影が生じず、結果として写真からは庭園の奥行きや遠近感が伝わりにくい。代わりに、写真中の対象物は平坦に写し出され、風景は水平に広がっていくようにみえる。さらに庭園の全景を写し出そうとする構図からは、撮影地点が、庭園の敷地上、つまり野外に位置していることが推察される。

次に、原田の画像にはほとんど人物が写されていないが、一方の

コンドルの画像には人物が写されていることが多い。写真中の人物は、コンドルや撮影者の指示によって意図的に配置されたのか否かを特定することはできないが、ここには二つの役割が考えられる。一つは、被写体のスケールを明示するという役割である。明治期には、古社寺や建築物を撮影する際に、被写体の大きさを伝える基準として人物が意図的に配置されたという。従ってその習慣が、庭園の撮影に応用され、庭園の規模を記録するために人物が置かれた可能性がある。二つには、被写体である庭園が、実際にどのように使われているのかを伝えるという役割である。堀田邸の橋の上に立つ人物（写真6）や向島百花園のベンチに座る人々（写真7）からは、庭園内の橋が使われている様子が窺える。これらの写真は、大きさを捉える記録としての役割と、実用面や風俗を伝える役割を果たし得ると考えられる。

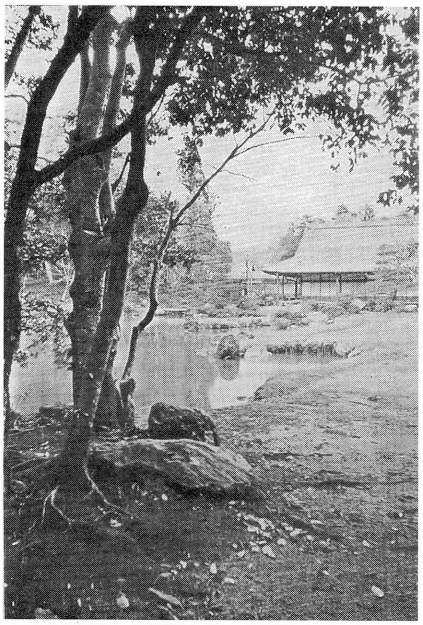

写真 8　天龍寺庭園（Harada，1928）

（2）原田の画面構成と広重の構図の比較試論

以上のように、原田とコンドルの画像は対照的な性質を有しているが、さらに原田の画像の構図についての分析を試みたい。特に、明暗を強調するライティングに加えて、構図の上でも前景と後景のコントラストを強調するという点をみてみたい。京都嵐山の天龍寺は、一三四〇（興国元）年に夢窓国師を開山として建立された臨済宗天龍寺派の大本山であるが、南北朝時代の例として選出された天龍寺の庭の写真には、局所拡大的な画面構成が顕著である（写真8）。写真8は、後景の大方丈に焦点が絞られている一方、前景の樹木が接写されている。また、画面を垂直に貫通する樹木の陰影と、

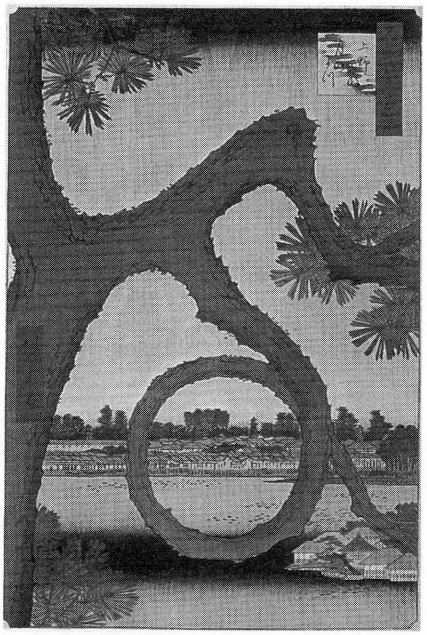

図 1　『名所江戸百景』「上野山内月のまつ」（座右宝刊行会編『浮世絵大系17「名所江戸百景（二）」』集英社，1976）

自然光がまぶしく反射する中景の曹源池とのコントラストは、見る者の視界を断絶するような画面を成している。こうした画面構成は天龍寺以外にも*The Gardens of Japan*に多く見出せるが、ここには歌川広重の『名所江戸百景』に特徴的な画面構成との親縁性がうかがえる。原田は一九二九（昭和四）年にThe Studio社から出版された*Hiroshige*という広重の画集の解説執筆者でもあるが、そのことと、独特なアングルには何か関連性があるのではないだろうか。しかしながら、画面上の類似性の検証には、ジャポニスムの状況下で、フランスの画家達と北斎や広重の空間表象に対する志向を検証した稲賀繁美が指摘しているように、方法論上の困難が伴う。[36] 方法論的には、二つの画面構成を記述することには限界があるが、広重の構図との比較を通じて、原田の提示した画像の持ち得た意義をこの類似性から考えてみたい。写真8のように、接写された前景に陰影が生じ、木立の隙間から明るく広がっていく後景を覗き込んでいるかのような構図は、図1の広重の「上野山内月のまつ」（『名所江戸百景』）にみられる構図との類似性が見いだせる。このように広重を想起させる画面構成の多用は、パノラマ的な視点や左右対称性の忌避を暗示しているのではないだろうか。さらに、こうした浮世絵的な構図は、既に後期印象派を通じて西欧における日本美術の特徴として定着したものであったことからも、*The Gardens of Japan*の写真は、記録の伝達だけでなく、美術の文脈にも符合する可能性を示唆している。広重などの浮世絵との関連性については、今後さらに調査が必要であるが、この可能性を検討するために、以下のコンドルとの比較でも随時広重の構図を参照していくこととする。

（3）鹿苑寺（金閣寺）庭園と岡山後楽園の画像分析

以上のように、室内あるいは縁側など屋内を思わせる撮影地点や、左右を非対称的に捉えるアングル、そして前景の一部を接写し全体のバランスをあえて崩壊させるかのような構図が*The Gardens of Japan*には多用されている。そしてそれらの構図は、室町期の作庭か否かという時代性、あるいは回遊式か枯山水かという様式、また規模の大小などの差異を超えて共通して用いられているのである。この点を確認するために、最後に、コンドルと原田が共通して選出した金閣寺庭園と岡山後楽園の写真を比較してみたい。その比較を通じて、*The Gardens of Japan*の視覚情報の性質を特定し得るであろう。

通称金閣寺で知られる鹿苑寺は、一三九七（応永四）年に足利義満が、鎌倉時代の西園寺公経の山荘跡に建てた京都の北山に位置する別邸だが、この庭は、金箔を施された楼閣建築の舎利殿「金閣」の前面の鏡湖池を大海と見立て、後方の衣笠山を借景として取り入れている。コンドルの付録の金閣寺庭園の写真（写真9）は、鏡湖池を挟んで金閣の対岸から撮影されている。写真のほぼ中央に位置

した金閣の前側面と左側面には同等量の光が当たっており、一見すると真正面から撮影されたかのように陰影がほとんどない。そのため、楼閣の立体感がわかりにくく、後方の樹木と前方の島と金閣との距離感が把握しにくい。写真には、鏡湖池に浮かんだ船に立つ漕ぎ手と、金閣の二層目（潮音洞）に佇む人物が写し出されている。船と漕ぎ手が配置されていることからは鏡湖池がどのように使われ得たのかが、そして楼閣の人物からは建物の尺度がうかがえる。

一方、*The Gardens of Japan*の金閣寺は、鏡湖池の対岸から撮影されているが、岸の土が画面の半分を占めており、光が反射する池とのコントラストが生じている（写真10）。画面のほぼ中央には陰影のある細木が垂直に貫通しているが、金閣の右横の桜の木には細木が倒れかかっており、三角形をなしている。この写真に関しても、先に述べたような広重的な構図が採用されていると言えるだろう。樹木のなす三角形の先に風景が広がるという構図は、広重の『木曾海道六拾九次』の「伏見」（図2）と重なってくる。前景に視界を遮るかのような茂みや樹木が配されており、その結果、まるで

写真 9　金閣寺庭園（Conder，1893）

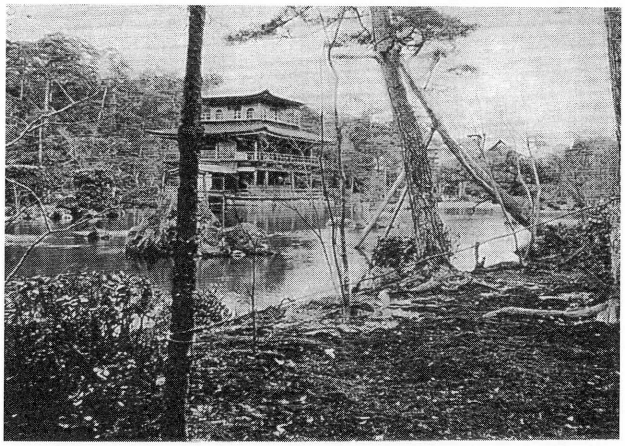

写真10　鏡湖池の対岸から撮影した金閣寺（Harada，1928）

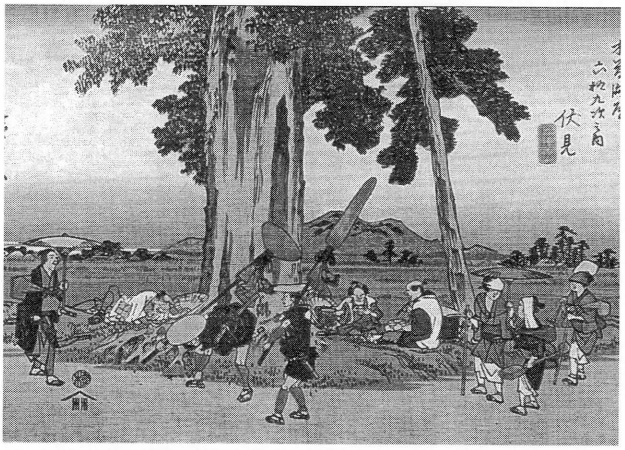

図 2　「木曾海道六拾九次之内　伏見」（座右宝刊行会編『浮世絵大系15「木曾海道六拾九次」』集英社，1975）

対岸の楼閣を木陰から覗き込むような構図を生み出している。焦点が楼閣に絞られていることによって、陰影のコントラストと相まって、撮影地点からの距離感が際立ち、立体的な印象を生みだしている。

金閣寺の画像にみられる特徴は、時代も様式も異なる岡山後楽園の画像からも見出すことができる。江戸時代を代表する回遊式庭園である岡山後楽園が岡山城の後庭として完成したのは、一七〇一（元禄十四）年であった。一万七千百坪にも及ぶ敷地には芝が敷かれており、物見台をかねた唯心山という築山のある南と花葉池のある西庭、そしてソテツ園が位置する中央と花交の池の東庭の三つに分けることができる。園内の南西にある月見橋や東方の薬草園、中央の池泉にある釣殿をもつ御野島、南には酒宴のための流店など、実際に人びとに使われていた機能を現在まで残している。

コンドルのSupplementの岡山後楽園の写真では、岡山城天守が画面の中央に借景として配置され、手前の池泉には、砂敷と松と雪見灯籠を置いた中島が浮いている（写真11）。画面全体に光が射していると同時に、画面手前の中島と池泉にはより強く光が射しているため、コンドルの写真の多くと同様に、識別はしやすいが対象物の立体感が把握しにくい。この写真では、中島の右側に岸から訪れるために使われる船が写っており、ここでもまた後楽園がどのように使われていたのかをうかがわせるが、これまでみたような人物は配されていない。

一方、*The Gardens of Japan*に掲載された岡山後楽園の写真でまず目を引くのは、左右を縁取る松の大木であろう（写真12）。巨大な松の影は黒く、その間に広がる庭園の風景の明るさが際だつ。左側の大木の横には人物が写っており、撮影当時に一般に公開されていたことを物語る。コンドルの写真中の人物のようにカメラの方を向くこともなく、一見目立たないが、左右の松の巨大さを控えめながらも強調している。建築物や樹木の大きさを伝えるという点においてはコンドルの画像の人物達と同様の機能を果たしているが、この写真の場合は、意図的に配置されたものではない。池泉と月見台をその間から覗き込むように、二本の松の大木が配置されているが、大木の間に広がる風景という構図は、広重が描いた細久手（『木曾海道六拾九次』）（図3）に通ずる趣向である。

以上のように、*The Gardens of Japan*の写真の撮影地点や構図は、本文の主張を視覚的に補うものであった。建物内に位置し、低い目線で撮られた写真は、局所拡大的な構図をもって写真に臨場感を仕掛ける役割を果たしたと考えられる。その臨場感は、実際に庭園を鑑賞する視線と写真を見る視線との交差を促したといえるだろう。つまり画面上に拡大された局所は、写真を見る者にとって、庭園の全貌を想像させ連想させる手がかりとしての機能を担っていたと考えられる。そこには、写真を見る者と実際の鑑賞者の〈共感〉

の成立と、その鑑賞者が庭園の一部を成すという原田の日本庭園論が集約されているといえる。

すでに明らかなように、*The Gardens of Japan*の写真を支えているのは、庭園の全貌を客観的に記録し伝達するという意思ではない。茶の湯文化という審美基準に立脚した眼差しは、クローズアップを多用し、陰影や奥行きを生じさせ、さらに広重の『名所江戸百景』や『木曾街道六拾九次』を想起させる大胆な構図をとった。コンドルの鳥瞰的な眼差しとは対照的に、たとえ記録を伝達する手段としては不適切であっても、*The Gardens of Japan*は個々の写真に美的鑑賞の役割を与え、それらを一つの美術作品として「創出」したといえるだろう。

これらの写真の撮影者についてであるが、コンドルの場合は、撮影はその多くが小川一真によるものと明記されているが[37]、どの写真が小川によるものなのか、またそれ以外の写真の典拠は何かなど不明な点も多い。一方、*The Gardens of Japan*には撮影者名が明記されていない。しかし、これらは原田本人によって撮影された可能

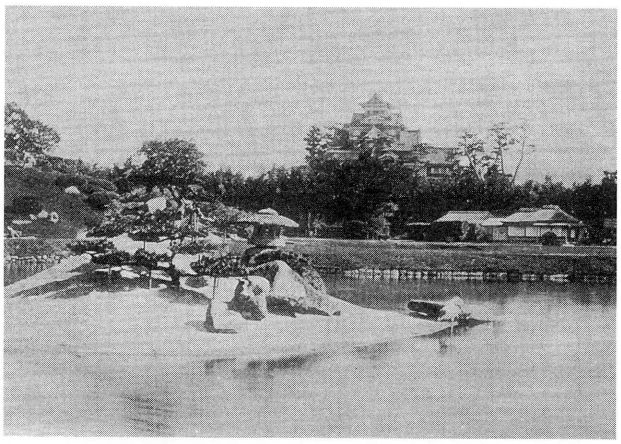

写真11　岡山後楽園庭園（Conder，1893）

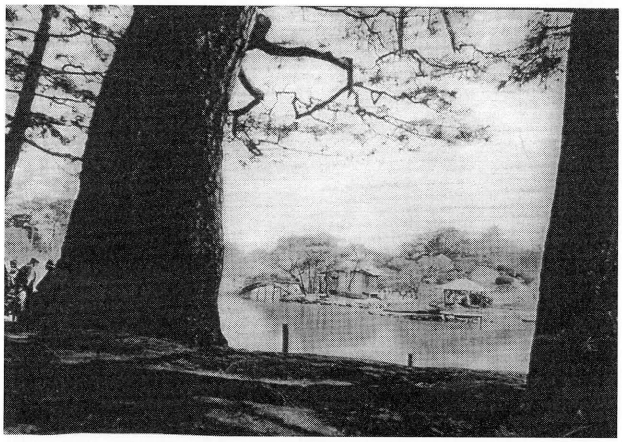

写真12　岡山後楽園庭園（Harada，1928）

図3　「木曾海道六拾九次之内　細久手」（座右宝刊行会編『浮世絵大系15「木曾海道六拾九次」』集英社，1975）

性が高い。*The Studio*の別冊である*Gardens and Gardening*の一九三八年号には、原田の記事が掲載されているが、ここでも、被写体の一部を接写する大胆な構図や、立体感を生みだす陰影など*The Gardens of Japan*と共通する特徴をもつ画像が認められる。それらの写真の脚注には、「Photo by Harada」と記してあり、原田本人による撮影であることが明記されている。昭和初期には、原田本人がカメラをもって撮影に赴くことは技術的にも可能であったと考えられる。あるいは原田による撮影でなかったとしても、本文の内容を補う機能を果たすアングルや構図の選出は、日本美術に根ざした原田の眼差し、あるいはかれの審美基準を反映したものといっていいだろう。

五　原田治郎の及ぼした影響～国外と国内のギャップ

では、原田治郎の*The Gardens of Japan*は、国内外でどのような反応を引きおこしたのだろうか。原田以降に出版された英文による日本庭園に関する記述は、一九四〇年までに十六件が確認できる。これら十六件中、新聞雑誌記事が二件、事典が一件、残り十三件が著作であるが、そのなかで原田の*The Gardens of Japan*を参考文献として挙げているのは六件である。[38] いずれの著作においても、コンドルと原田が英語圏における日本庭園理解の基本的な情報の提供者として位置づけられている。はたして、原田の*The Gardens of Japan*は、以降の英文による日本庭園論にいかなる感化を与えたのだろうか。

イギリスの雑誌*House and Gardens*の編集者のリチャード・ライト（Richard Wright）（生没年不詳）は、一九三四（昭和九）年に世界の庭園について論じた*The Story of Gardening*をイギリスで出版し、その中の一章を日本の庭にあてている。本書はその後も度々、重版が続けられている。ライトは、コンドルと原田とデュ・ケーン[39]（Du Cane）（生没年不詳）を参考文献として挙げ、以下のような日本庭園の禅的な解釈を示している。単に禅の影響に触れるのみではなく、欧米人による禅的な解釈が示された英語文献としてはもっとも早いものの一つと考えられる。

> It is one of the characteristics of Japanese art that the artist seems never to complete his work - the print seems unfinished, the garden lacks some final reality. And therein lay a principle of the Zen Buddhistic belief - each devotee, by his inner illumination, was capable of finishing the picture or the garden himself, according to his own light. A few suggestions sufficed to arouse his intuitive perceptions.[40]
>
> （日本の芸術の特徴の一つに、芸術家たちは作品を決して完成させ

ないということがある。日本の版画が未完成にみえるように、庭もまた最終的な現実を欠く。そこにこそ禅仏教の教えがある。鑑賞者は内なる輝きによって絵画や庭園を自身で完成させるのである。）

岡倉の名前は参考文献として挙がっていないため、『茶の本』についての知識が既にあったのか、それとも原田を介しての理解なのか特定はできないが、このような禅に基づく庭園の理解には先にみた岡倉と原田の系譜が読み取れるといっていいだろう。また昭和六（一九三一）年に来日し、同志社大学で英語を教えながら京都に住んで日本の庭園についてまとめたアメリカ人のカック（Loraine Kuck）（生没年不詳）は、一九三六（昭和十一）年に*One Hundred Kyoto Gardens*を出版するが、本書はZen Gardensという語が初めて使われた著作であり、国内外において龍安寺の石庭を禅的に解釈した初めての文献と指摘されている。[41] 参考文献として、コンドルの*Landscape Gardening in Japan*と原田の*The Gardens of Japan*そして龍居松之助の*Japanese Gardens*（一九三四）と田村剛の*Art of the Landscape Garden in Japan*（一九三五）、さらに志賀直哉（一八八三―一九七一）と橋本基（生没年不詳）の*Gardens of Japan*（一九三五）の五冊が明記されている。また謝辞には、「For technical and historical information about these gardens I have drawn heavily from the works of *Jiro Harada*, *Tsuyoshi Tamura and Mirei Shigemori*.」とあり、原田治郎、田村剛、重森三玲（一八九六―一九七五）が挙げられている。『京都の百名園』という訳になろうか、ここに日本側が提示した日本庭園像に基づき、京都の「名園」のみを扱った英語の文献が現れたのである。本書でカックは、日本の庭には通常眺めるのに最も適した場所があるが、それは多くの場合はポーチ（porch）、つまり縁側あるいは屋内であり、そこから坐って眺めることを推奨すると論じているが、[42] 原田の庭園論が参照されているものと想定できる。本書は、同時代の日本庭園研究者達からは概して好意的な評価を得た。[43] カックについて筆者が調べた結果、日本を離れた後、ハワイに移住し中国系アメリカ人の造園家と結婚したことがわかったが、それ以外には未だに不明な点が多い。特に、*One Hundred Kyoto Gardens*を執筆する際に、禅の思想を誰から学んだのかを明らかにする作業は急務である。これより四年後の一九四〇（昭和一五）年に出版した*The Art of Japanese Gardens*の序文では、京都で隣人となった鈴木大拙（一八七〇―一九六六）への謝辞が述べられており、この時点で鈴木大拙を介して禅を理解していたことがわかるが、限られた資料からは*One Hundred Kyoto Gardens*を執筆していた頃に鈴木大拙と交流があったことは断定できず、いまだに検討すべき点が多く残っている。[44]

カック以降の一九四〇年代までの欧米人による日本庭園論には、

原田がコンドルと並んで頻繁に参考文献として挙げられていたが、一九五〇年代に入ると、日本人の専門家と欧米人の専門家の台頭によって、英語による日本庭園論は量産されていった。その後も、英語による日本庭園に関する文献が増加するが、原田の庭園論は参照され続けた。一九七三（昭和四十八）年に出版されて以降現在に至るまで、造園学の教則本として広く読まれているクリストファー・サッカー（Christopher Thacker, 生没年未詳）による*The History of Gardens*（一九七三）は、原田治郎の*The Gardens of Japan*とコンドルの著作が、一九六〇年代以降の欧米人による日本庭園論と並んで参考文献に挙がっている。ちなみに、一九六〇年より以前に出版された本でサッカーが参考文献として挙げているのは、原田とコンドル、そして『源氏物語』の英訳本だけであり、一九三〇年代に出版された日本人による欧文の日本庭園論は一切含まれていない。さらに二〇〇二（平成十四）年には、コロンビア大学出版から原田の*The Gardens of Japan*の復刻版が出版された。さらなる質的検証と量的調査をなお要するが、以上の事実が示すのは、原田の*The Gardens of Japan*は、欧米圏における日本庭園理解において同時代にはスタンダード（標準）を提供し、二十一世紀を迎えてクラシック（古典）と見なされるに至ったという可能性である。

ところが、日本国内での原田の評価は、海外での場合と趣を異にする。日本国内では、後に造園学会会長を務めた佐藤昌（一九〇三―二〇〇三）が、一九三三（昭和八）年に著した論文で原田に言及している。佐藤は、十七世紀から十九世紀までの欧米人による日本庭園に関する記述を紹介し、かれらの日本庭園理解についての評価を下している。その中で、「最も注目すべき又忘れてならない事」として原田の日本庭園論を次のように評している。

> 最近又ストウーデイオの特輯号で原田次郎（ママ）氏の「日本庭園」が発行された事は注目に値ひし、大いに日本庭園の実情を紹介するに貢献あつたらう事は想像に難くない。氏は主として写真に重きを置いて、日本庭園の本質的内容及歴史については尚遺憾なしとは云へないが、之によつて日本庭園が世界的に有名になり且つ重要なる真価が知れ渡つた事は氏に感謝しなければならない。[45]

佐藤は、原田による*The Gardens of Japan*の「本質的内容及歴史」には「遺憾」であり、視覚的情報を提供し「世界的に有名になり且つ重要なる真価」を広めた点には「感謝」を覚えるという。具体的に何をさして、「遺憾」なのかはこの論文からだけでは特定できない。しかし少なくとも佐藤にとって、日本庭園の「実情を紹介」することと、日本庭園の「本質的内容及歴史」が区別されており、原田は前者の役割だけを果たしたと断ぜられたことが明らかで

ある。

同時期、造園史家の針ヶ谷鐘吉（一九〇六―）は、コンドル以降の欧米人による日本庭園論を検証し、その論文で原田に言及している。針ヶ谷は、*The Gardens of Japan*が欧米で認知されていることに触れながら、「岡倉覚三氏の『茶の本』に相当する『庭の本』は矢張我々日本人の手によつて成されねばならぬと思ふのである」[46]と述べている。これはつまり、原田治郎の著作が欧米では知られているが、岡倉の『茶の本』にはなお匹敵しないという批判を暗に述べているといえるだろう。針ヶ谷もまた、原田の著作の内容について紙面で検討を加えていないため、どの部分が十分でないのか、何を論じれば日本人による『庭の本』となり得るのかを特定することはできない。佐藤と針ヶ谷に通じているのは、まず原田が世界的に認知されていることを知っていながらも、原田の日本庭園論の内容に踏み込まず、積極的に評価しようという姿勢を見せていないことである。

こうして欧米と日本国内での対照的な評価をうけた原田治郎は、第二次世界大戦後になって徐々にその存在が気付かれるようになりつつも、日本国内の庭園研究者たちに功労者として取りあげられることはなかった。造園学者の上原敬二による回顧録には、戦後における原田に対する評価をうかがわせる一節が見出せるので、最後に触れておきたい。上原はそれまで疑問に思っていたコンドルの*Landscape Gardening in Japan*の日本側の協力者について、東京大学講師で、明治神宮造営技師を務めた大江新太郎（生没年不詳）に尋ねた場面を、次のように回想している。

> 筆者（上原敬二）はこの書物（コンドル*Landscape Gardening in Japan*）の完成に当たり、日本人として誰が協力しているのかについて永い間疑問をもっていた。この書物の影響を受け、前記東京大学建築学科において庭園の講義を行っていた大江新太郎講師は前記の協力者は美術家原田治郎ではなかろうかと筆者に語ったことがある。[47]

結論からいって、大江の推測は正確ではない。なぜならコンドルが*Landscape Gardening in Japan*を著したとき、原田はわずか十五歳、渡米を目前にしていたか、あるいは渡米直後の時期と重なっているからである。しかし、ここからわかることは、昭和五十年代の日本では、原田が以前よりも認知されていたとはいえ、未だに原田についての正しい情報が共有されていなかったという事実である。

六　おわりに

以上の考察から、西欧の日本庭園研究史における原田治郎の特異な位置が明らかになったであろう。原田は、必ずしもそれまでにな

い独自の日本庭園論を提示したというのではない。むしろ原田の重要性は、先行する岡倉天心の芸術観や禅と茶の湯の思想を日本庭園の理解に結びつけて欧米の読者に示したところにある。そして岡倉を踏まえつつ、庭を屋内から鑑賞するというパラダイムを英文で提示し、それを写真によって定着させた点に原田の意義が認められよう。さらに、本文の内容を補強するような画像を多く提示したことも大きな特徴であり、全体像が把握しにくい構図や部分を切り取るようなアングルの写真は、見えない全貌への想像を促すという点において、庭園と鑑賞者の「共感」を論じた原田の主張を視覚的に立証する役割を担っていたといえる。原田は、庭園の写真に広重に通ずる日本美学を付与して欧米諸国へ伝達したと考えられる。

しかし一方では、原田の日本庭園論は、日本国内における庭園研究との距離を生むことを意味していた。一九一九（大正八）年に「史跡名勝天然紀念物保存法」が公布されて以降、建築学や歴史学と連動しつつ、地形測量や実測図作成、そして発掘調査という研究手法を重視する造園学が成立する。そうした時代状況の中にあって、原田の日本庭園論は、庭園研究のフォーマットからは疎外される経緯を辿ったのではないかと考えられる。

原田治郎は、庭園史はもとより美術史によって取り上げられる思想家や批評家という分類にはついに属さず、生涯を通訳や翻訳といった黒子に徹した実務者であった。原田の活動が現在に至るまで顧みられなかった事実は、庭園史と美術史における交流史的な視点の不在と、実務者への関心の希薄さという方法論上の問題点に繋がってくる。

原田の活動をその文脈とともに再構成することは、西欧における「日本庭園」という異文化の創出プロセスの解明に繋がっていくであろう。異文化交流史における媒介者への着眼は、ひいては西欧における日本イメージの生成というオリエンタリズムと、その応答としての自画像の提示というセルフ・イメージの創出との循環構造を解く手がかりにもなり得ることだろう。

付記　なお、その後の調査から確認し得た原田の著作・論文のリストを本稿の末尾に付したので参照されたい。

謝辞　本稿は、平成十五年度メトロポリタン東洋美術研究センターの助成の成果の一部であり、明治美術学会での報告を基に執筆したものである。執筆にあたり、原田治郎氏のご子息である原田俊夫先生（早稲田大学名誉教授・白鷗大学名誉学長）と恵美子夫人には貴重な資料のご提供、ご協力を賜りました。記して深謝申し上げます。

表1　欧文による日本庭園に関する図書

出版年	タ　イ　ト　ル	著　　者
1868	*The Leisure Hour*	著者不明
1868	*Garden at Hatta*	Beato, Signor F.
1879	*Geschichte der Gartenkunst*	Huettig, O.
1886	*Japanese Homes and Their Surroundings*	Morse, Edward
1888	*Madame Chrysantheme*	Loti, Pierre (Vaud, L. M.J)
1888	*Gartenkunst und Gaerten Sonst und Jetzt: Handbuck fuer Garethner, Architekten und Liebhaber.*	Jaeger, H.
1890	*Things Japanese*	Chamberlain, Basil Hall.
1892	*The Garden of Japan: A Year's Diary of its Flowers.*	Piggot, F. T.
1893	*Landscape Gardening in Japan*	Conder, Josiah
1894	*Glimpses of Unfamiliar Japan*	Hearn, Lafcadio
1897	*An Artist's Letters from Japan*	La, Farge, John
1899	*A Model: Japanese villa*	Ogawa, K
1902	*Japan: A Record in color*	Menpes, Montimer
1902	*La Formation des arbres nains Japonais*	Maumene, Albert
1905	*Japon*	Regamey, Felix
1908	*The Flowers and Gardens of Japan*	du Cane, Florence
1910	*Landscape Gardening Studies*	Persons, Samuel
1910	*Historical garden in Kyoto*	碓井　小三郎
1910	*The official Catalogue*	The Kyoto Commercial Museum
1911	*Garten Technik und Gartenkunst*	Meyer und Ries
1911	*The Art of Landscape Architecture*	Persons, Samuel
1912	*Japanese Gardens*	Taylor, Mrs. Basil
1913	*Garden Craft in Europe*	Triggs, Inigo
1913	*Geschichte der Gartenkunst*	Gothein, Marie
1913	*Blossoms from a Japanese garden: a book of child-verses*	Fenollosa, Mary
1914	*Les Divers Styles de Jardin*	Fouquier, M.
1914	*Design in Landscape Gardening*	Root, R. R. and C. F. Kelly
1915	*Pagodas in Sunrise Land*	秋山愛三郎
1916	*Japanese Gardens Portraying National characteristics*	本多静六
1917	*An Introduction to the Study of Landscape Design*	Hubbard, H. and T. Kimball
1918	*Garden Ornament*	Jekyll, Gertrude
1920	*The Harvest of Japan*	Luffmann, C. B.
1921	*東京朝日新聞*	ノースクリッフ卿
1921	*Characteristics Gardens in Japan*	高木庭次郎
1925	*Notes Japanaises*	Bouchot, Jean and H. Coucherousset
1926	*Ueber Garten Kunst und Gaertnerei in Japan*	Molisch, Hans
1926	*Japanese Landsacpe Gardens*	Japanese Government Railways
1928	*The Gardens of Japan*	原田治郎
1930	*O Kvetinach a zahradnictvi j Japonsku*	Prochazka, Jan
1932	*Imressions of Japanese Landscape Architecture*	Waugh, Frnak
1932	*ツーリスト*	ロックウッド
1934	*Japanese Gardens*(*Tourist Library v*.5)	龍居松之助
1935	*「米國庭園協会代表と日本の庭園」『庭園と風景』*	團伊能
1935	*Japanese Gardens*	Lee Guy
1935	*Some Old Kyoto Gardens and Their Thought*	Sherill, Charles H.
1935	*Moods of a Japanese Garden*	Snell, Fanny
1935	*The Art of the Landscape Gaden in Japan*	田村剛
1935	*Gardens of Japan*	志賀直哉・橋本基編
1936	*The Garden Dictionary: An encyclopedia of practical horticulture garden management and landscape design*	著者不明
1936	*One hundred Kyoto Gardens*	Kuck, Lorain
1936	*The Art of Japanese Gardens*	Kuck, Lorain
1936	*The Lesseon of Japanese architecture*	原田治郎
1937	*Japanese Gardens*	Newsom, Samuel
1937	*Gardens of Japan*	国際文化振興会
1938	*Comparison of Occidental and Oriental concepts of flowers and gardens*	Gorham, Hazel
1938	*Tray gardens-symbol of the permeation of culture in Japan*	Gorham, Hazel
1939	*Japanese Gardens Construction*	Newsom, Samuel
1939	*Jadin Japonais*	田村剛

（※鈴木誠『欧米人の日本庭園観』の資料をもとに、筆者の調査を加えた。）

注

(1) Harada, Jiro, 1928a, *The Gardens of Japan*, Edited by Geoffrey Holme, The Studio Limited. Holmeは美術雑誌*The Studio*の当時の編集長である。*The Studio*の企画による単行本が出版される際には、編集として名前が挙げられている。鈴木誠［一九九七年『欧米人の日本庭園観』造園学論集別冊No.2、東京農業大学造園学科］の調査に依れば、原田治郎以前の日本人による英文の日本庭園に関する文献は、五件ある。内訳は、洋画家本多錦吉郎が米国建築協会に向けて書いた小論文［1902,"Japanese Gardens" in *European and Japanese Gardens: a Series of Papers read before the American Institute of Architects* Ed. Glenn Brown. Henry T. Coates & co］や秋山愛三郎の自費出版本［1915, *Pagodas in Sunrise Land*, Akiyama, Tokyo］そして本多静六による雑誌記事［1919, Japanese Gardens Portraying National Characteristics, *Japanese Magazine*］、また神戸の写真家高木庭次郎による写真集［1921, *Characteristics of Gardens in Japan*, Takagi Photo］や日本国鉄道省が発行した観光案内書［1926, *Japanese Landscape Gardens*, Japanese Govt. Railways］であるが、このうち四冊は日本国内での出版である。アメリカで出版された著作に収録された本多1902は、庭造りの実践書としての性質の強い小論文である。

(2) Tatsui, Matsunosuke (龍居松之助),1934, *Japanese Gardens*, 国際観光協会 ・Tamura, Tsuyoshi (田村剛),1935, *Art of the Landscape Garden in Japan*, 国際文化振興会など。

(3) Conder, Josiah, 1893, *Landscape Gardening in Japan*, Kelly & Walsh.
鈴木前掲書（注1）参照。鈴木は、十七世紀から二十世紀後半までの欧文による日本庭園に関する記述、海外で作られた日本庭園の調査、さらに日本在住の欧米人へのアンケートを通して、外国人の日本庭園理解を検証している。複合的な手法を用いているが、鈴木による欧文文献の調査は原文の質的な分析が十分とは言い難い。さらに、日本側から提示した日本庭園論は、関心の外に置かれ、西欧と日本との交流という観点が不在といえる。

(4) Okakura, Kakuzo,1902, Notes on Contemporary Japanese Art, The Studio, Vol. 25, pp.126-128.岡倉は既に*The Ideals of the East with Special Reference to the Art of Japan* ［1903, John Murray］や*The Book of Tea* ［1906, Fox, Duffield and Company］を著していた。

(5) Harada, Jiro, 1910, Japanese Art and Artists of Today --Painting, *The Studio*, Vol. 50, pp.98-123, そのほかWood and Ivory Carving (1910, Vol. 51, pp.103-118.), Metal Work (1911, Vol. 52, pp.95-105.), Cloisonne Enamels (1911, Vol. 53, pp.271-286)

(6) Harada, J, 1956, The Bonsai Exhibition in Tokyo, Eight Illustrations, *The Studio*, Vol. 152, pp.150-153.

(7) Harada, J., 1923, The Japanese Gardens, *The Studio* Vol84, pp.264-270.

(8) Harada, J., 1928b, The Garden of Shoren-in, Kyoto,

The Studio. Vol. 95, pp.261-262.

(9) Harada, J., 1928c, Viscount Shibuzawa's Garden. *The Studio*. Vol. 96, pp.184-187.

(10) Harada, J., 1956, Old Hama Palace Garden, *The Studio*, Vol. 151, pp.102-105.

(11) *The Official Catalogue* [1910, The Kyoto Commercial Museum] の謝辞には、Mr. Jiro Harada, Nagoya Imperial High Schoolと記されている。また、Basil Taylor [1912, *Japanese Gardens* with twenty-eight pictures in colour by Walter Tyndale, R. I. Methuen & Co. Ltd.] は、庭園史の禅の箇所を著すにあたって*The Official Catalogue*に全面的に依拠したと明記している。

(12) 東京国立博物館編、一九七三年『東京国立博物館百年史』三三二－三三四頁

(13) 団伊能、一九三七年「巴里より帰りて（上）」『庭園』五：二四－二七頁

(14) 原田治郎、一九三七年「米国に於ける日本庭園に就て」『庭園』六：六－九頁

(15) 団前掲書（注13）二五頁

(16) 原田俊夫氏談

(17) 一九五一（昭和二十六）年に開催されたサンフランシスコ日本古美術展については、美術研究所『日本美術年鑑　昭和二十二－二十六年版』（一九五二）や文化財保護委員会『桑港日本古美術展覧会　昭和二十六年九月六日－十月五日』（一九五二）を参照。

(18) 東京国立博物館前掲書（注12）、六四五頁

(19) 東京国立博物館前掲書（注12）、六四七頁

(20) 横井時冬、一八八九年『園芸考』大八洲学会

(21) 秋里籬島の『築山庭造伝』（一八二九）では、茶庭の心得を説く際に『茶話指月集』（一七〇一）を参照したと思われる箇所がある。さらにこの秋里の著作を参照した横井時冬の『園芸考』（注20）や本多錦吉郎の『図解庭造法』、ジョサイア・コンドルの*Landscape Gardening in Japan*などでも茶庭の項目で茶の文化の理解が必要であると論じられている。しかしこれらの著作においては、茶の文化と禅の関係性は特に論じられていない。

(22) 岡倉覚三、一九二九年『茶の本』村岡博訳、岩波書店、二一頁

(23) 「渋い」という概念は、これまでアメリカの雑誌House Beautifulが、当時の編集長ゴードンによる柳宗悦への取材を基に組まれた一九六〇（昭和三十五）年八月号に「shibui」という特集号が出版されて以降、欧米に普及していったと言われている。すると原田による*The Gardens of Japan*誌上での「渋み」の紹介は、通説より先んじていたと考えられるが、この点については欧米における日本文化受容という観点からさらなる考察が必要と思われる。熊倉功夫「渋い」、一九九九年『外国語になった日本語の事典』岩波書店、九〇－九四頁

(24) Harada1928a:38

(25) Harada1928a: p.4

(26) Harada1928a: p6

(27) Harada1928a: p.7

(28) 鈴木誠、一九九七年『欧米人の日本庭園観』造園学論集別冊No.2、東京農業大学造園学科

(29) 片平幸、二〇〇四年『日本庭園像の形成と解釈の葛藤』総合研究大学院大学学位請求論文

(30) Harada1928a：pp.24-25

(31) 注(21)と同じ

(32) Okakura1906（注4）。

(33) Okakura1903（注4）、岡倉天心、一九八三年『東洋文庫　東洋の理想他』佐伯彰一、桶谷秀昭、橋川文三訳、平凡社、一三〇頁

(34) Marie L. Gothein［1928, *A History of Garden Art*, J. M. Dent & Sons,（ドイツ語初版1913, *Geschichte der Gartenkunst*, Bd. 1. 2. Jena, Diederichs.）］や本多前掲書（注1）などには、コンドルのSupplement（付録）の写真が転用されている。

(35) Conder1893: pp. 16-17。また、明治に多くの庭園が破壊されたことは小澤圭次郎が、「明治庭園記」［日本園藝研究会編、一九一八年『明治園藝史』西ヶ原叢書刊行会］で主張している。

(36) 稲賀繁美、一九九九年『絵画の東方　オリエンタリズムからジャポニスムへ』名古屋大学出版会

(37) 小川一真とは、九鬼隆一や岡倉天心そしてフェノロサが中心となった近畿宝物調査（一八八八年五月～）に随行した写真師である。小川はそのほかにも、明治に刊行された美術全集『真美大観』（一八九九～一九〇八）やHistoire de l'Art au Japon（一九〇〇）などの写真を担当している。小川の活動に関しては、岡塚章子の「写された国宝－日本における文化財写真の系譜」［東京都写真美術館企画・監修『写された国宝：Image and Essence』展覧会カタログ、二〇〇〇a］や、「小川一真の「近畿宝物調査写真」について」［東京都写真美術館編『東京都写真美術館　紀要No.2』二〇〇〇b］を参照。

(38) アメリカの造園学者Hubbard, H. V. and Kimball, T., 1929, *An Introduction to the Study of Landscape Design*. Revised Edition. The Macmillan Company, New York と、イギリスの雑誌*House and Gardens*の編集者であるRichard Wrightが一九三四（昭和九）年に、*The Story of Gardening*, George Routledge and Sons, Ltd.、自費出版本のLee, Guy., 1935, *Japanese Gardens*. Decoration of the text by Aiden L. Ripley. Privately Printed in Boston Massachusetts. と昭和六（一九三一）年に来日したKuck, Lorain, 1936, *One Hundred Kyoto Gardens*. Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd.

(39) Florence Du Cane, 1908, *The flowers and gardens of Japan*, A. & C. Black.

(40) Wright, p.147

(41) Kuck, Lorain, *One Hundred Kyoto Gardens*, Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd, London, 1936

(42) Kuck1936, p.3

(43) 「新刊紹介」『林泉』一九三七年二月、六九－七一頁の他、石原耕作、内田桂一郎、池ノ上容「ブック・レビュー」『造園研究』一九三七年六月、九三頁など。

(44) オランダ人日本庭園研究者のウィーベ・カウテルト（Wybe

Kuitert）と石庭をめぐる言説を研究した山田奨治は、Kuckに禅の影響を与えたのは、鈴木大拙であると論じている。一九四〇（昭和十五）年に出版された*The Art of Japanese Gardens*には確かに鈴木大拙を参照しているが、*One Hundred Kyoto Gardens*の執筆に影響を及ぼしたという主張には検討の余地がある。*One Hundred Kyoto Gardens*では、参考文献として明記されているのは、コンドルの*Landscape Gardening in Japan*と原田の*The Gardens of Japan*、そして龍居松之助の*Japanese Gardens*（一九三四）と田村剛の*Art of the Landscape Garden in Japan*（一九三五）、さらに志賀直哉と橋本基の*Gardens of Japan*（一九三五）の五冊のみであり、本文でも触れたように謝辞にあるのも原田と重森三玲、田村剛のみである。鈴木大拙の名が明記されていないこともまた、交流がなかったことの証左にはならないが、*One Hundred Kyoto Gardens*の執筆当時に鈴木大拙との交流があったならば、*The Art of Japanese Gardens*の序文のように、どこかにそれが記されていると考えることは自然ではないだろうか。資料が限定されている以上、鈴木大拙がKuckに影響を及ぼしたと一方向的な関係性でとらえるのではなく、鈴木大拙の影響力をより相対化する視点が必要と思われる。なぜならば、Kuckの禅的な解釈を鈴木大拙の影響に還元してしまうことで、彼女が参照枠とした他の諸要因の微妙な重なり合いとそこから生成した庭園観の歴史的重層性から目をそらすことになってしまうからである。鈴木大拙の影響を否定するものではなく、むしろ、一九三〇年前後の庭園をめぐる言説を扱う意義とは、一九六〇年以降に迎える禅のブームの土壌がいかに整っていたのかを明らかにすることにあるといえる。

(45) 佐藤昌、一九三三年「外国人の見たる庭園」『園芸学会雑誌』四（一）：八三―一〇六、一〇五頁

(46) 針ヶ谷鐘吉、一九三五年「コンドル博士の日本庭園観」『庭園と風景』十七：七―九、三八頁―九七頁、九四頁

(47) 上原敬二、一九七九年『談話室の造園学』技報堂出版、二一頁

付録　原田治郎の論文・著作一覧

年代	論文・著作タイトル	掲載誌名・出版社名
1910	Japanese Temples and their treasures.	International Studio 42, pp.299-312
1910	Japanese Art and artists of today: Wood and ivory carving.	International Studio 42, pp.103-119
1910	The Official Catalogue.	The Kyoto Commercial Museum.（京都商品陳列所）
1911	Old Japanese folding screens.	International Studio 45, pp.110-122.
1911	Japanese Art and artists of today: Cloisonne enamel-work.	International Studio 44, pp.271-286.
1912	The Old and New Schools of Japanese painting.	International Studio 48, pp.231-236.
1912	The Japanese Exhibit at the Esposizione Internazionale di Belle Arti at Rime.	International Studio 46, pp.68-73.
1913	Modern tendencies in Japanese Sculpture.	International Studio 37, pp.13-20.
1915	The Modern development of Oil painting in Japan.	International Studio 55, pp.270-278.
1923	The Japanese Garden.	Studio 84, pp.264-270.
1928	The Garden of Shoren-in, Kyoto.	Studio 94, pp.261-262.
1928	The Garden of Shoren-in, Kyoto.	Creative Art 1, pp.260-262.
1928	Visount Shibuzawa's Garden.	Creative Art 2, pp.184-187.
1928	The Gardens of Japan.	The Studio, edited by Geoffrey Holmes.
1928	The Lesson of Japanese Architecture.	The Studio, edited by Geoffrey Holmes.
1929	Garden-Art in Japan.	Architects' Journal 69, pp.162-165.
1932	English Catalogue if treasures in the imperial repository Shosoin.	Imperial Household Museum（帝室博物館）
1934	Examples of Japanese Art in the Imperial Household Museum.	Imperial Household Museum（帝室博物館）
1937	A Glimpse of Japanese Ideals: Lectures on Japanese art and Culture.	Kokusai Bunka Shinkokai.（国際文化振興会）
1940	Painting/Masterpieces of Japanese Art.（日本美術聚英）	Bunka Koryu Kurabu, edited by Seiroku Noma（野間静六）, assisted by Takaaki Matsushita（松下隆章）
1941	Architectural Decoration in China（支那建築装飾）/Ito Chuta（伊藤忠太）	Toho Bunka Gakuin.（東方文化学院）
1948	Sculpture and art Crafts/ Masterpieces of Japanese Art.（日本美術聚英）	Bunka Koryu Kurabu, edited by Seiroku Noma（野間静六）
1949	The story of old Chinese Ceramics（中国古陶磁の話）/Fujio Koyama（小山冨士夫）	Maruyama & Co.
1950	The Shosoin: an Eighttth century Repository.	Maruyama & Co.
1956	Old Hama Palace Garden.	Stduio 151, pp.102-105.
1956	The Bonsai Exhibition in Tokyo	Studio 152, pp.150-153.
1956	Japanese Gardens: Successor to the Gardens of Japan.	The Studio